

芦屋大学論叢 第75号  
(令和3年7月27日)抜刷

自閉スペクトラム症と定型発達の境界に関する  
心理臨床学的考察

ー心理検査バッテリー結果を通してー

林 知 代



# 自閉スペクトラム症と定型発達の境界に関する心理臨床学的考察

ー心理検査バッテリー結果を通してー

林 知 代

## 1. はじめに

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder : ASD 以下本論では ASD と記す) の特性はあくまでも「スペクトラム」で、定型と非定型の境目は明瞭ではない。特に知的能力が普通以上で言語能力も遅れはない場合、定型発達と何をもって違うというのかについて、充分実証されていないのが実情である。特に臨床場面で出会う ASD 者は、本人が感じている周りとの異質感や疲労感を、本人自身も周りも理由がわからなのまま見逃されてきた場合が多い。また、ASD における臨床像を不明瞭にさせている原因の一つは、いわゆる高機能の発達障害という括りの中の、多動性・衝動性 (HD) と不注意性 (AD) の特性が多かれ少なかれ混在している点にある。本研究では、まず ASD の医学的診断を受けており、ほぼ通常生活を送っている成人の ASD 6 名と、定型発達として通常生活を適応的に送っている成人 5 人について、その違いを見るためにテストバッテリーを組んで、考察を行った。テストバッテリーについては、個人々人についての精査を行うために、自閉症診断ツールのスタンダードとして、世界的に評価されている ADOS 及び ADI-R の日本語版 ADI-R を実施したが、本研究においてはその結果を踏まえつつ、比較検討がより明確に提示できる 4 検査についての分析を中心に考察する。また今回挙げている ASD の 6 名は、いわゆる ICD-10 (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems : 疾病及び関連保健問題の国際統計分類) ではアスペルガー症候群に該当し、定型発達と一見してその判別は困難な者を指している。

## 2. 自閉症スペクトラム症におけるアセスメント視点

ASD は自閉という共通の特質があるが、パーソナリティの違いや置かれた環境との相互作用によって多様性が見られる。そして、その特性の型は、「マインドブラインドネス仮説」「実行機能障害仮説」「中枢性統合の弱さ仮説」という視点から検討可能である。これら 3 つの視点に加え「感覚の過敏と鈍感」の 4 つの視点から ASD の領域と自閉レベルの両軸を通して、ASD のアセスメントをよりの確に行うことができる。

まず、「マインドブラインドネス仮説」であるが、Baron-Cohen は最初、他者や自分の心の状態 (信念、願望、意図など) を読む基礎的な能力が ASD には欠損していると考え、「心の理論障害仮説」を提唱した。その後の研究で欠損ではなく、遅れであるということが明確になったため、「マインドブラインドネス仮説」(1995/2002) 理論に修正した。Stern D. の発達論でいう Domain of intersubjective relatedness 領域、つまり生後 15 か月ごろに芽生える社会的自己感領域にあたる、自他の心の状態をキャッチする能力の発達が ASD では遅れているため、対人行動で不器用さや奇異さが生じるのである。時には積極的に関わりを求めるとにもかかわらず人間関係を構築できないということが起きる。アスペルガー症候群レベルでは、心の理論の発達がゆっくりとながらも知的能力・認知能力を駆使し、失敗経験を振り返ったり他者を観察したりすることによって適応的に人間関係の仕方を獲得していく例が散見される。その場合も、筆者の臨床経験から、

自然に獲得するというより、意識的に学習する行程を経る。自閉症では心の理論を獲得するのは、認知能力を考えると非常に困難であることが推察される。その質的共通性はマインドブラインドネスということである。

心の理論の領域を獲得するのに多くの同年齢の人とは質的な違いがある。他者との情緒的関わりは、相手の立場や心的状態を把握したり共感したりというやり取りではなく、同一化や自分に向かう空気の察知能力を通して行っているようだ。ユーモアを理解するとか、相手が話したがっていることを見抜くとか、皮肉やうそを見抜くといったようなことは非常に難しい。

2つ目の仮説は、ルリヤの「実行機能障害仮説」(1973/1978)である。実行機能とは活動をコントロールする能力のことであり、学習上における実行機能とは次の4つの内容、①望ましい目標を設定する、②目的を達成する合理的な手順を考える、③他のものに気を取られず、物事に専心する、④その結果が最初の目標とどこまで一致しているのかを検討する、という能力を指す。ASDの場合、この4つの実行機能に問題があるとするのが、「実行機能障害仮説」である。Baron-Cohen (2008/2011)は自閉症やアスペルガー症候群の人たちの特性について、シングルフォーカス(単焦点)という言葉を用いて生活上の二重焦点を維持の困難や、同時遂行能力が低い可能性について述べている。注意の切り替えが困難であるということは、新しい場面に順応しづらく、日課や行動の順序が邪魔されると強く当惑するなどに関係してくる。たとえできたとしても、定型発達者が抵抗なくできるレベルの、状況への切り替えや、変化への適応には、馴化に強い意志力や意識化を要するといえる。

3つ目にFrithら(1994)による認知心理学的な考え方である「中枢性統合の弱さ(weak central coherence)仮説」である。いわゆる木を見て森を見ることができないとの比喻を用いて語られることがある。部分の集まりから全体を捉えたり、社会的状況の背後にある文脈を捉えたりする能力、つまり全体像をとらえる能力が中枢性統合であり、前頭葉機能の一つだとされている。知覚情報を処理する際に、部分の処理や細部に集中するやり方をとるため、処理の全体優位性が二次的に低下すると考えられている。中枢性統合の機能はさまざまな情報を統合して、文脈の中でより高次の意味を構築する働きを指す。全体像や文脈を無視して、部分に注目するというASDに特徴的な情報処理スタイルで、ASDにおいては全体の意味を見出そうとすることよりも部分に部分のまま関わろうとする傾向が強い。中枢性統合の弱さは同時に周りに頓着しないで部分を見ることに優れる能力とも言える。意味を伴わない機械的記憶に優れる事と関係していると考えられる。ASDにおいては、さまざまなレベルの情報を統合して全体の大きなまとまりとして捉えることが困難で、断片化した情報として理解するために、文脈や社会的状況の理解が困難になる。このことがコミュニケーションの日常会話や社交の場での会話を苦手とする一因になっているともいえる。優先順位がつけられないことは整理整頓が苦手、片付けられないというASD特性に繋がっている。

以上三つの症状仮説は、ASDの典型的な特性である。感覚過敏に関しては、これら三つの症状仮説では説明できずASDの特性としてDSM-5診断基準にも次の記述によって明らかにされる。「感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味(例:痛みや体温に無関心のように見える、特定の音または触感に逆の反応をする、対象を過度に嗅いだり触れたりする、光または動きを見ることに熱中する)」。

### 3. 知能テスト (WAIS-IV : Wechsler Adult Intelligence Scale) の結果と考察

#### 3.1 ウェクスラー知能テスト成人用 (16歳から90歳11ヶ月)

WAIS-IVは4つの群とそれぞれの下位検査から構成されている。4つの指標得点群指数にはまず、言語理解がある。これは、言葉を中心とした理解力、知識などの能力を表す指数である。2番目に、知覚推理がある。これは、視覚を中心とした状況の把握、理解の力などの能力を示す指数である。3番目に、ワーキングメモリーがある。これは、聴覚を中心とした記憶や注意力、集中力などの能力を示す指数である。4番目に、処理速度がある。これは、作業の正確さやスピード、処理能力などの能力を測る指数となる。ASDやAD、HDなどの発達障害の診断の補助として使われることがある。全体的な知的水準とともに得手・不得手領域の予測をすることが可能である。

#### 3.2 検査結果と考察

以下のような結果となった。

(表1 ウェクスラー知能テスト WAIS-IV 検査結果)

	被験者	全検査	言語理解	知覚統合	ワーキングメモリー	処理速度	ディスクレパンシー	
							群差	言語:知覚
ASD	ASD-A	116	115	124	119	90	34	9
	ASD-B	116	130	95	137	110	42	34
	ASD-C	105	122	91	125	71	54	31
	ASD-D	124	130	112	119	114	18	18
	ASD-E	68	71	70	90	96	26	1
	ASD-F	59	70	51	67	87	36	19
定型発達	定型-1	113	119	120	106	87	33	1
	定型-2	84	88	78	100	87	22	10
	定型-3	114	117	109	109	108	9	8
	定型-4	111	108	124	97	102	27	16
	定型-5	73	81	71	82	82	11	10

上記の検査結果を踏まえ、全体の傾向をみると、ASD、提携発達ともに被験者の全検査IQはばらつきがあり、平均してIQ98である。ASD-Eが低い、ASD-Fは非常に低いという結果になっている。しかしADI-R検査において、Fは学童期極端に成績が悪いということはなかった。自閉スペクトラム症と知能は関係しない。群間の差を見ると、明かにASDの方が定型発達に比べ大きい。ASD-DがASD被験者の中で最も群差が18と小さかった。15以上でディスクレパンシーがあるとされ、この差をASDアセスメントの参考にすることがある。ASD-Dの18が、必ずしも差がないとは言えない。おしなべて高い能力の持ち主であるが、この群差は、特に言語理解(VCI)言語理解指標によるものである。語彙やことばで説明する能力指標で、「結晶性知能」と言われるこれまでの経験や学習が土台となる領域である。しかし言語に強いことや言葉表現の得意さがそのままコミュニケーションをとることの得意さに結びついていない点に注意を要する。定型-1、定型-2、定型-4の群差はゆうに15を上回っているが、ASDとの違いは知能テストだけではわからない。ASD-Cは群差54、ASD-Bの群差42で、各群におけるばらつきと併せて、日常生活の適応が大変であることが推察できる。定型-1において処理速度における単純な作業(例えば学校の勉強だとノートを書き写すようなこと)に困難を覚えたり、速度は平均的でもケアレスミスが多かったりなどの点が極端に低く、どのように適応的に過ごしているかを他検査の結果と総合的に観ることで、ASDの生きにくさが明らかになりうる。以上の結果から、群間の差は大きい傾向はあるにしても、知能テストのディスクレパンシーのみでASDか否かの判断はできないことがわかる。

## 4. AQ 検査の結果と考察

### 4.1 AQ : Autism-SpectrumQuotient (自閉症連続体指数) 検査

Autism-Spectrum Quotient (AQ) は, Baron-Cohen et al., (2001) によって考案された自閉スペクトラム症特性を測定する質問紙である。社会的スキル, 注意の切り替え, 細部への注意, コミュニケーション, 想像力という 5 つの下位尺度からなる。これらの下位尺度は理論的に導かれたものであり, 因子分析の結果抽出されたものではない。Baron-Cohen et al., は, ASD は定型発達成人に比べて AQ の得点が高いことを報告している。加えて, 5 つの下位尺度には許容範囲の内的整合性と高い再検査信頼性が認められた (Baron-Cohen et al., 2001)。AQ には日本語版 (AQ-J) が作成されており, 本邦においても ASD 特性の個人差を特定する質問紙として用いられている (若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)。

AQ-J の妥当性について, 若林ら (2004) は ASD 群, 一般大学生群, 一般成人群を比較し, ASD 群は一般大学生・成人のいずれの群よりも AQ-J の合計得点が高くなったことを報告している。また信頼性についても, AQ-J には十分な内的整合性と高い再検査信頼性があることが示されている (若林ら, 2004)。因みに若林らが提示した数値は以下になっている。

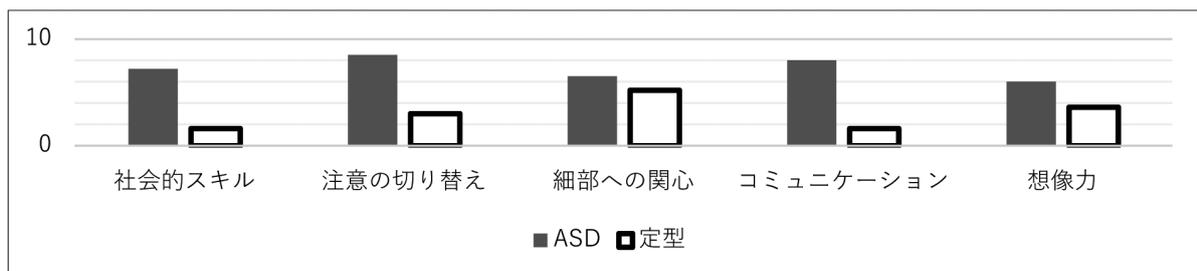
	平均年齢	人数	平均点
健全な社会人	33.6	194	11.5
健全な大学生	20.3	1050	20.7
ASD (アスペルガー症候群・高機能自閉症)	26.9	57	37.9

### 4.2 検査の結果と考察

(表2 AQ 検査結果)

	被験者	社会的スキル	注意の切り替え	細部への関心	コミュニケーション	想像力	AQ得点
ASD	ASD-A	7	9	9	10	8	43
	ASD-B	10	10	8	8	7	43
	ASD-C	8	8	6	8	9	39
	ASD-D	7	9	8	8	3	35
	ASD-E	6	8	6	8	3	31
	ASD-F	5	7	2	6	6	26
	平均	7.2	8.5	6.5	8	6	31.2
定型発達	定型-1	0	4	6	2	8	15
	定型-2	1	1	9	1	2	14
	定型-3	1	5	5	5	2	18
	定型-4	4	4	5	0	5	18
	定型-5	2	1	2	0	1	6
	平均	1.6	3	5.2	1.6	3.6	14.2

(図1 AQ 検査平均比較)



被験者の AQ 検査結果は上記のようになった。

定型発達者と ASD 者間の差異が、AQ 検査で明確に表れる結果となった。若林の結果報告(2004)の ASD の平均は 37.9 であった。この数値を本研究の被験者に比すと、ASD-A、ASD-B、ASD-C においてこの平均を上回る数値であった。ASD-D は、35 であるが、想像力の項目で 3 となり、他の項目においては高い数値であった。ASD-F は 26 で最も低かった。それでも若林の健常者表記の数値に照らすと高得点である。6 名中 4 名にコミュニケーションで本人が非常に困難を感じていることが想像できる。注意の切り替えはすべての ASD 者で高い数値となっており、加えて社会的スキルにおいても数値が高く、重複することによって出現の仕方が複雑になると考えられる。提携発達者はいずれも健常な大学生の平均値を下回っていた。項目別にみると、提携発達者において、社会的スキルに問題を抱えていないということは社交的な状況に抵抗なく、新しい人との交流を楽しみ緊張しないことがわかるが、ASD 者の場合、社交状況で困難を抱えていることがわかる。注意の切り替えにおいて、提携発達者は自分の日課や行動を柔軟に状況に合わせてフラストレーションを生じさせないで生活しているが、ASD では、この領域は特に多くの刺激に左右される一方、順序にこだわり物事の視点が狭窄的になり、没頭するとそれだけしか見えない状況になる傾向が強いことがわかる。細部への関心において、小さな物音や細かい変化に気づいたり、誕生日などの数字や番号についてこだわったりすることは、提携発達である程度みられるが、極端にならない場合他者への気配りなどになる。細部への関心が定型発達では最も高く、ASD では最も低くなっている。コミュニケーション領域は、気軽な日常会話や冗談を入れるなど、人間同士の潤滑油的部分である。定型発達では、全く抵抗なく会話をやり取りしている様子がわかる。一方、ASD では、相手との自然なストロークが困難であることがわかる。想像力は、ASD-A と ASD-C で高い数値が出ており、物語を空想したり抽象的な概念を広げたりすることが難しいことがわかる。言葉を字義通りに受け取っていることなどの語用論的なコミュニケーションの困難さがある。定型-I も高い数値になっているが社会性において全く抵抗がないことが、補償要因となっている可能性がある。

## 5. 日本版感覚プロファイル (SP : Sensory Profile) 検査の結果と考察

### 5.1 日本版 S P の概要

感覚プロファイル (Sensory Profiles) は、Dunn W. が開発した (Dunn, 1999 ; Dunn, 2002 ; Brown & Dunn, 2002)。Dunn は、感覚処理は刺激に対して神経学的作用と心理的作用の両方が影響している現象であり、この双方の複雑な関わりによって、同じ刺激でも感覚の捉え方は個々に異なり、また個人内においても感覚の解釈は一定にはならないとしている (Dunn, 1997)。2015 年に辻井正次監修で日本版が出ている。感覚の過敏さや過鈍さといった問題について、聴覚・視覚・触覚・口腔感覚等、複数の感覚領域にわたり包括的に把握することができる。感覚刺激の過敏と過鈍と ASD の関係について、臨床現場では、DSM-5 に感覚の過敏と過鈍に関連する項目が織り込まれる以前から報告されていた。長南 (2014) の調べでは、ASD 児の半数以上に感覚の特性が生じ、生活の困難と結びつき、その程度や種類も個別性が高いことが報告されている。今後は感覚の特性に関する研究も増加していくと予測される。また ASD 児の母親は、早期から感覚の特性に気がついていることが多く、感覚特性が母親の感じる育てにくさと関係している可能性についても、長南(2014)が述べているところである。

## 5.2 検査結果と考察

感覚 SP 結果は以下ようになった。

(表3 感覚 SP 検査結果)

	被験者	低登録	感覚探究	感覚過敏	感覚回避
ASD	ASD-A	非常に高い	高い	非常に高い	非常に高い
	ASD-B	非常に高い	高い	非常に高い	非常に高い
	ASD-C	非常に高い	平均	非常に高い	非常に高い
	ASD-D	平均	低い	高い	高い
	ASD-E	高い	平均	高い	高い
	ASD-F	高い	平均	非常に高い	非常に高い
定型発達	定型-1	低い	非常に高い	高い	高い
	定型-2	低い	高い	平均	平均
	定型-3	低い	高い	平均	高い
	定型-4	低い	非常に低い	非常に低い	低い
	定型-5	低い	低い	低い	低い

<非常に高い>は正規分布で示した場合約2%の割合で、感覚処理に問題があることを示している。低登録が高いということは、動作を持続させる神経の活性が風聞であることを意味し、反応が鈍く引きこもりがち様子（辻井，2015）を特徴とする。ASD者ではDを除く全員が高い（正規分布上14%）から非常に高いという結果が出ている。一方、定型発達者はすべて低いという結果になっている。感覚探求領域は、感覚刺激を作り出し求めて行く傾向を示している。この領域におけるASDと定型発達者の明確な相違は表れていない。定型発達者-1では非常に高い、定型発達者-4では非常に低いという両極の結果が出ている。ASD者は高いから低いという範囲で、自ら刺激を求める行為は極端ではない。感覚探求が高いとみられるものをいじったり鼻歌を歌ったりなどの一方で人の話を聞き逃すということが現れる。感覚過敏領域では、ASD者に顕著に高いことがわかる。感覚が過敏であるとは、神経学的閾値が低いということであり、些細な刺激を取り込み、馴化が困難である。感覚回避もASDにおいて高いから非常に高いという結果となっている。他方、定型発達では、高いという結果も見られるが全体的には低い傾向がある。ASD者が、入ってきた刺激を行動や行為で調整するより、回避することで、つまり自閉的防衛によって調整することがわかる。

## 6. 自閉スペクトラム症（ASD）とAD/HD/LDの重複検査の結果と考察

### 6.1 発達特性重複検査の概要

林と三浦は2019年に、ASD（自閉性）とHD（衝動・多動性）、不注意性（AD性）、及び学習障害性（LD）の各特質は重複しているとの考えのもと、74名の発達障害特性を持つ被験者から40問の質問紙を実施回答柄が。調査結果を、信頼性と妥当性から28項目に下位尺度を精選し作成したものである。いわゆる発達障害と呼ばれる5つの特性群は、まず自閉性を示すASD、多動と衝動性を示すHD、寡動と不注意性を示すAD、そして学習における特定の能力の習得と使用に著しい困難が見られるLDである。

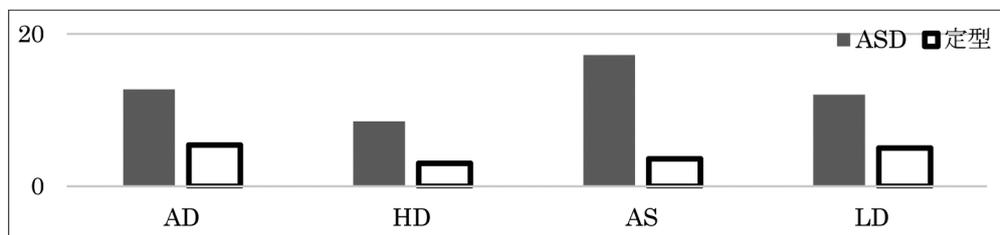
得点が10以上は特性が非常に強く、日常生活に影響を及ぼしているレベルである。6から9は日常的には注意を要するレベルであり、5以下は日常に支障はない。また、本検査は、支援のための特性の重複の状態を知るために作成したものであり、診断を目的にしたものではない。

6.2 発達特性重複検査の結果と考察

(表4 発達特性重複検査結果)

	被験者	AD傾向	HD傾向	AS傾向	LD傾向	発達得点
A S D	ASD A	14	12	19	18	63
	ASD B	10	6	21	10	47
	ASD C	9	2	17	12	40
	ASD D	13	7	14	5	39
	ASD E	17	13	18	13	61
	ASD F	13	11	14	19	57
	平均	12.7	8.5	17.2	12	51.2
定 型 発 達	定型-1	5	7	10	12	34
	定型-2	0	2	2	0	4
	定型-3	9	2	2	10	23
	定型-4	5	2	4	1	12
	定型-5	8	2	0	2	12
	平均	5.4	3	3.6	5	17

(図2 統特性傾向 ASD と定型発達比較)



結果は以上のものであった。被験者 ASD 者は ASD の診断をすでに受けており、ASD 特性に高い得点が出たのは当然といえる。表で見るように、ASD 者は、特性に起因する日常生活の困難さを抱いていることが分かる。特性は、AS のみならず、AD との重複が大きく、HD との重複は比較的小さいことが分かる。このことから、AD 特性と HD 特性はその違いを明確にし、当人の特性理解に繋ぐことが必要であろう。また、LD にも高い数値が出ている。特性傾向によって、学習面での努力と結果にも影響していると考えられ、本来の能力が充分発揮されていないことも推察される。このことは、学校集団でも人間関係や社会性のみならず、成績の面でも自己価値を低くする要因になっていると考えられる。

一方、定型発達においては、定型発達-1 に AS と LD にその傾向がみられるが、ADI-R によると自己調整によって日常生活に影響するほどの特性の強さが現れていないともいえる。

## 7. 全体考察

### 7.1 ASD 者と定型発達者のディスクレパンシーについて

群差が 10~15 以上ある場合、ディスクレパンシーを指摘される。ASD 者と定型発達者との群差の違いは明らかであり、断定はできないとしても、ASD 者における得手不得手の偏りが大きい。また、領域におけるの偏りというより、出来る・出来ないの両極のギャップに定型発達との相違が現れていることが分かる。しかし、定型発達者もディスクレパンシーは見られ、ディスクレパンシーのみで ASD と直結して考えることはできないことが分かる。その他の検査を総合的に観て、ASD 特性についての濃淡について検討することが必要であろう。一方、定型発達者における言語理解と知覚統合の群差は 1 名を除いて 15 以下であり、最も群差の大きい定型-4 でも 16 であった。言語性と知覚統合に関してみると、ASD-A を除く ASD 者が知覚統合より言語理解の方が高い得点となっている。言語性 IQ は、知識や言葉の理解から、耳で聴く情報を理解する等、言語にまつわる能力であり、知覚統合 IQ が、目に見える情報をすぐに理解・記憶する能力であることを考えると、ASD 者にとって、単純に、伝達に絵や図での説明の方が理解できるとは言えない。ASD 者の他者理解困難は、ブラインドマインドネスとの関連に起因している考える方が妥当ではないかともいえる。ASD-A から F までの数値差は、それぞれ 9, 34, 31, 18, 1, 19 であった。偏りが 15 以上で両群においてディスクレパンシーが見られるのは B, C, D, F 定型-1 から 5 までの数値差は、それぞれ 1, 10, 8, 16, 10 である。定型発達においても 15 以上の群差はみられるため、群差のみで ASD か定型発達かを問うことはできないということである。ASD のディスクレパンシーは非常に高く偏りは大きいものの、偏りの領域は各自さまざまであることも推察できる。ASD に特有の得手不得手の能力の型があるとも言えないということである。

### 7.2 ASD 者と定型発達者の「マインドブラインドネス」について

マインドブラインドネスというのは、他者自他の心の状態をキャッチする能力の発達が遅れていることを意味している。そのため、対人行動で不器用さや奇異さが生じる。知能との関連で考えると、全般的に低知能の場合、意志疎通が困難な場合は生じうる。相手が意味することを理解したり、字義通りにとったり、自分流に受け取ったりすることがあるからである。今回の被験者では、ASD-F は全検査において知的障害を示唆するがその群の数値を観ると言語理解は 70, 処理速度は 87 で、理解して学習ができていない可能性が高いが、一見するとついていけているように見えるため、本人の遅れに気づくのが遅れる可能性があるだろう。ASD-F は、AQ の注意の切り替えが高いものの、ASD 特有の細部への関心は 2 でほとんどない。特性の重複性では ASD 傾向があり、LD が強く出ている。特徴的なのは感覚 SP 結果に見られる。意味理解より、相手の非言語的刺激、例えば、特に他者とのやりとりにおいては聴覚からの強弱刺激や表情などを頼りに、周りと適応的反応をしようとしていることを示唆する。感覚入力 of 閾値が低く過敏性に対して回避しており、感覚を自ら求めることはないので大人しいが奇異な行動として現れないことが分かる。

マインドブラインドネスの状態を示しているのは AQ 検査の質問項目である社会的スキルとコミュニケーションであろう。社会的スキルは、社交性を問う項目で人を求めるかどうか重点が置かれている。またコミュニケーションは、会話のやりとりに困難さがあるかどうか得点の有無となる。会話は知的説明とは異なり、自他の状況を把握しながらやり取りすることを求められる。ASD では、情緒的な表出への困難がある一方、感覚の過敏性を ASD は持っていることが多いが、自他の心的状態の認知と表出は、感覚をキャッチすることとは別物である。自他の心的状態が分からないと会話にぎこちなさが出るのは自然なことである。

また相手の心的状態を把握するためには想像力を要する。しかし、ASDと定型発達の違いは、想像力より社会的スキルとコミュニケーションの方が大きい結果となった。自他の意図や期待、願望がある程度把握できても、それを何らかの形で表出し、他者と相互交流をする術を持たないことの方が、日常の困難を招いている可能性がある。

一方、定型発達は、知能検査での群差が大きい者も社会的スキルとコミュニケーションに全く抵抗が見られず、ASDとの相違点がこの二つの項目で際立って異なる点となっている。

### 7.3 ASDと定型発達の「実行機能障害」について

実行機能とは望ましい目標を設定し、目標を達成するために計画・予測し、合理的な手順を考え、他の事に気を取られず専心し、結果が、最初の目標とどこまで一致しているかを検討する能力を意味している。ASDは、一つのことに没頭して周りが見えなくなるという特性を持つ。AQ検査の「注意の切り替え」の項目に関する特性である。これに「細部への関心」が重複すると、ふつう定型発達者なら見逃してしまうことながらも注意が向き、さらにそこから気持ちが離れない状態を意味している。こうした状態は、その時々で第一義的なことを優先して行う柔軟さを持ち合わせないため、周りの見通しを立て、目標をたてて計画的に物事を実行していくことは難しくなるのは明らかであろう。置かれた環境の規制枠が、厳しければ厳しいほど、適応が困難になる。視点を変えると、定型発達を基準にしたルールの設定ではなく、没頭可能な環境で、本人の閾値を配慮し、本人が限界を超えても気づかずやり続けた結果、過度の疲労や現実感覚の喪失となる可能性を鑑み、限界設定を充分配慮するなら、ASD特性と環境との葛藤は軽減されるであろう。Crancy B.(2002)は、社会的および情緒的な能力に直接対処するカリキュラムを含むプログラムを推奨しているが、そもそも実行機能力が低い場合、自己制御の能力に違いが出るのは明らかである。ASDとHDでは異なる時間的設定をするなど、枠組みの異なる対応が必要であろう。

実行機能は、知能検査においてはワーキングメモリーの下位項目とも関わってくる。ワーキングメモリーの高さが自己制御（セルフコントロール）に関連し、ワーキングメモリー容量の低い人よりも上手く注意制御・実行機能に優れており、課題目標の維持や競合解決において高い成績を示す（村方，2012）。ワーキングメモリーで高得点であったのは、ASDも提携発達も偏りはなかったが、ASD-BとASD-Cにおいて、ワーキングメモリーの群得点が最も高く、かつ言語理解と知覚統合の差がディスクレパンシー34と31という高い数値であった。ADI-Rでは、両者とも記憶力に優れ、学校の成績は高得点であったが、必ずしも見通しを持って学習をしたという報告はない。実行機能はAQ検査の高得点結果からみても、困難を要するといつてよい。

### 7.3 ASDと定型発達の「中枢性統合の弱さ(weak central coherence)」について

部分の集まりから全体を捉えたり、社会的状況の背後にある文脈を捉えたりする能力、つまり全体像をとらえる能力が中枢性統合である。知覚情報を処理する際に、部分の処理や細部に集中するやり方をとるため、処理の全体優位性が二次的に低下すると考えられている。中枢性統合の機能はさまざまな情報を統合して、文脈の中でより高次の意味を構築する働きを指す。全体像や文脈を無視して、部分に注目する特性の有無を示すのは、AQ検査の細部の関心の項目である。実行機能の見通しを立てることに加え、物事を部分や細部に過度に注意が向くと、日常で些細なことが重大問題となり、先行きが見えないために、物事を第三者的に客体化してみることができない状態になる。細部への関心について、ASDと定型発達を観ると、ASDは全体的に高いが全員ではないし、提携発達の中にも高いものも存在する。つまり、この項目のみでASDを決めることができない。

#### 7.4 ASD と定型発達者の感覚の過敏・過鈍と他特性との重複について

環境設定は、定型発達者の感覚標準に合わせておおかたは成り立っている。その標準の閾値内であれば、多くの人にとってはやり過ぎたり、調整をしたりすることをほとんど無意識レベルで行って負荷はかからない。集団のざわめきや喧噪、突然の音、あるいは気温に対する体感、場所の匂いなどの五感からの刺激は、生理的感覚といってもよい。ASD では、定型発達者の耐性枠を超えて感知することが感覚 SP 検査結果からも明瞭である。しての強弱をはじめとする五感に関する感じ方には、個々人に生来的な相違があるということは長らく取り上げられなかった。それほど感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さの日常生活への影響は認知されずにきた。気づかれたとしても、単に脆弱性や不器用さとして扱われる域を出なかった。しかし馴化を目標とすべきではなく、個々の刺激入力への閾値の自然な反応であるという視点から捉えることによって、発達の基本となる安心と安全を確立することが可能となる。

児童期から思春期にかけての実行機能の発達においては、慣習的行動への固執の克服、刺激を目の前にした反動的な制御から刺激不在でも事前の準備を行う順向的制御へ、外的駆動型制御から内的駆動型制御へとという3つの変化が現れ、より柔軟な行動を行えるようになるが、こうした変化も、「マインドブラインドネス」の発達同様、時間を要する。このとき、成人であれば、知能のタイプや対人の関係パターンなどの特性の有様を併せて考えることが必要である。

### まとめ

Stern D. (1985) の情動発達概念に照らして、本人がどのように世界を感じるかという視点からとらえると、ASD は、まず誕生時から感覚の過敏性によって、外界からの刺激が閾値を超えやすいため、定型発達児より安全感を破られやすい状態にあるといえる。次にブラインドマインドネスの特性が自他の情動状態をキャッチすることを困難にしていること、そして想像力の脆弱性により、自他の感情、自他の意志、自他の願望についての鈍感さが、自己の中核形成を難しくすることが推察できる。次に社会的スキルやコミュニケーションの困難さは、他者とのスムーズな交流を体験できない状況を生む。このように考えると、ASD がある領域で高い知能を持っていたとしても、その能力が充分発揮できるためには、定型発達者以上の環境設定の配慮を要するだろう。それが叶わない場合、易疲労感が蓄積することとなり、慢性的疲労状態で潜在的能力の発揮の困難さはもとより、基本的な心理的安寧感の獲得が難しいことは明らかである。この点は養育者との愛着形成の問題と絡んでくるが、本論の域を出るため触れずにおく。

定型発達の中にも ASD 特性傾向を思わせるものいる。定型発達-1 では、感覚探求が非常に強いが他検査では標準を超えない。定型-4 は言語理解と知覚統合の群差 16 でディスレパシーを示すが感覚 SP では感覚探求と感覚過敏が非常に低いという結果で他検査では際立って注目すべき得点結果は見られなかった。一方、ASD では、ASD-D のように感覚 SP では「高い」はあるものの、「非常に高い」はない。しかし、他検査では明らかに特性を満たす結果となっている。このように考えると、ある領域で突出して ASD 特性があったとしても、日常生活の中で自己修正しやすく、当事者も ASD をパーソナリティの範囲で人間関係や社会に適応的に送っている。ASD と定型発達の境界は、多くの ASD 特性が重複するかどうかである。今回の結果は、ASD 特性を多面的、かつ包括的に捉えることが、彼らの人生の意味を豊かにするために大切であることの示唆を含んでいる。

## 【参考文献】

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 5th edition. Washington D.C.: American Psychiatric Publication. 高橋三郎・大野 裕 (監訳) (2014) : DSM- 5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院).
- Austin, E. J. (2005) Personality correlates of the broader autism phenotype as assessed by the Autism Spectrum Quotient (AQ) . *Personality and Individual Differences*, 38, 2, 451-460.
- Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. Boston: MIT Press/Broadford Books.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J. & Clubley, E. (2001). The Autism-Spectrum Quotient (AQ) Evidence from Asperger Syndrome High-Functioning Autism, Male and Females, Scientists and Mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 31, 1, 5-17.
- Brugha, T. S., McManus, S., Bankart, J., Scott, F., Purdon, S., Smith, J., Bebbington, P., Jenkins, R, Wing, L.(1981). Asperger syndrome: A clinical account. *Psychological Medicine*, 11, 1, 115-130.
- Blair, C. (2002). School readiness: Integrating cognition and emotion in a neurobiological conceptualization of child functioning at school entry. *American Psychologist*, 57, 111-127.
- Blair, C. (2010). Stress and the development of self-regulation in context. *Child Development Perspectives*, 4, 181-188.
- Stern D. (1985). *The Interpersonal World of the Infant*. New York: Basic Books.
- Dunn W. (1999, 2006) :Sensory Profiles.OTR.FAOTA. NC'S Peason Inc. 辻井正次 (2015) :日本版感覚プロフィール。日本文化科学社
- 長南 幸恵(2014) : 児者の感覚の特性 (過敏と鈍麻) に関する国内研究の動向. 自閉症スペクトラム研究/12 巻 1 号 /書誌 ASD p. 29-39.
- 林知代・三浦 正樹 (2019) : 発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討 芦屋論叢第 71 号, pp.45-55.
- 林知代(2017) : 誕生最早期における自己の統合に関する臨床的考察—感覚の閾値に代表される気質的差異—. 芦屋大学論叢第 67 号, pp.23-34.
- 林知代(2017) : 自己発達における中核自己感領域の発達構成要素に関する心理臨床学的考察. 芦屋大学論叢第 67 号, pp.51-59.
- 若林明雄・東條吉邦・Balon-Cohen, S・Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化 —高機能臨床群と健常成人による検討—. *心理学研究*, 75, 1, 78-84.
- Wing, L. (1988). The autistic continuum. In L. Wing (Ed). *Aspects of autism: Biological research*. London: Gaskell-Royal College of Psychiatrists.

